

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 馬 嶋 俊

論 文 題 目

Bronchial wall thickening is associated with severity of chronic rhinosinusitis

(気管支壁肥厚は慢性副鼻腔炎重症度と関連する)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

長 紀 恒 也



名古屋大学教授

委員

八 木 哲 也



名古屋大学教授

委員

秋 山 真 志



名古屋大学准教授

指導教員

橋 本 直 純



論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2





今回、慢性副鼻腔炎(CRS)が下気道構造に影響を及ぼしているという仮説の元、三次元 CT を用いて、CRS 患者が気管支壁肥厚していることを確かめた。当院通院中の患者で、胸部 CT と副鼻腔 CT を 1 年以内に撮影した症例を診療録より抽出し、後方視的研究として実施した。結果として、CRS 患者は非 CRS 患者よりも、有意に気管支壁の肥厚を認めた。更に、年齢、喫煙歴や胸部症状を調整した多変量解析でも、CRS は気管支壁肥厚に関与する因子であった。また CRS の重症度スコアである Lund-Mackay score (LMS) が、気管支壁厚と強く相関していた。今回の結果により、胸部症状や気道疾患に関わらず、CRS やその重症度が下気道構造に強く影響していることが示された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. CT による気道寸法の評価は非侵襲的であり、気道壁リモデリングや不顕性気道炎症の評価に有用と報告されている。そのため、今回気管支壁肥厚を来していた CRS 患者は、潜在的気道炎症や将来的な下気道疾患の合併を起こすことが予測される。また下気道疾患の患者は、CRS 合併の早期発見につながるとも考えうる。
2. 当院で CT を受けた全ての患者を連続して解析し、副鼻腔 CT と胸部 CT を受けた理由は多岐に渡っていた。本研究では無症状の患者や下気道疾患と診断されていない患者を対象としており、更に喘息などの肺疾患を除いた症例で解析しても、CRS 患者は有意に気管支壁肥厚を認めた。
3. 今回 CRS 患者内で、上葉気管支と下葉気管支の気道壁を比較したが有意な差異を認めなかった。過去に CRS 患者の気管支壁を直接測定した論文は確認されていないため、実証は難しい。しかし、COPD や気管支喘息の患者の気管支壁を測定した論文では、左右気管支、上葉下葉気管支で比較しても、気管支径に差異がないと報告していた。そのため、CRS 患者における気管支の構造も部位に偏らず肥厚していることが推察される。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	馬嶋俊
試験担当者	主査	長 純 恒 乙 	副査 ₁	八木 哲 也 
	副査 ₂	秋 山 真 志 	指導教員	稀 田 直 紀 
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. CTで評価した気管支壁肥厚は、臨床的にどのような意義があるか？ 2. 後方視的研究なので、結果に恣意性がないことが示せるか？ 3. CRSは後鼻漏などで、特に下葉の気管支に強く影響を及ぼすことが予測されるが、肺の分岐で気管支壁肥厚に差異がないか？ <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、呼吸器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				